展望台

本音で！

土志田　実

本年４月に防衛装備庁電子装備研究所（電装研）所長に着任しました。所内での着任挨拶は新型コロナウイルスの影響により館内放送で行いましたが、「何事も本音で話してほしい」と所員に伝えました。ここでも、常日頃思っていることを率直に書き記したいと思います。

電装研は、1952年の創設当時の通信、レーダ技術を対象とした組織から、情報、光波センサ、電子戦、サイバーの技術を加え、2019年４月には宇宙領域を研究対象に含めた組織へと成長してきました。わが国を取り巻く安全保障環境が大きく変化するなか、新たな領域として重要視されている宇宙・サイバー・電磁波（宇サ電）に関わる技術や、ゲーム・チェンジャーとなり得る最先端技術として高出力マイクロ波や高出力レーザなどの高エネルギー技術の研究も実施しています。さらに、戦闘機の性能を左右するステルスや電子戦に係る技術についても担当しています。これらの技術分野の重要性や具体的な実施内容については、公開されている技術戦略関連文書や、防衛装備庁あるいは電装研のホームページやパンフレットなどにも掲載しています。また特にトピックスのようなものについては本誌にも寄稿していますので、そちらを

ご参考になさってください。

読者の方も同じ状況かと思いますが、着任後は日々新型コロナウイルス感染拡大防止の対応に追われています。このような状況はとりわけ特別ですが、時代の流れは以前に比べ速くなり、予測困難な世の中が現実のものとなっています。日本を取り巻く安全保障環境も例外ではなく、極めて速いスピードで変化しています。防衛装備庁の研究開発部門は、どのような状況になっても、わが国の技術的優位性を確保する責務があり、そのための装備品を自衛隊に適時提供する必要があります。そして、その優位性を維持するために先を見据えた技術的基盤を育成していく必要もあります。

しかし、ひと言で技術的優位性を確保するといっても実際にそう簡単にできることではありません。多種多様な装備があり、幅広い技術分野に対応する必要があります。また研究所の視点のほかにも、実際に運用、整備する側の視点や、ものつくりの立場からの視点も考慮しなくては、より良い装備品を産み出すことはできません。しかも、装備品は大規模化・高度化・複雑化し、人材・予算・時間についても厳しい制約があります。

では、どのように進めたら良いでしょうか。そのためには、逆にこのようなときだからこそ、関係する組織およびそこに所属する人たちとの連携が重要になると考えています。意味深い、より密接な連携を実現するためには、自身・所属する組織の立ち位置や役割を十分に理解し、自分たちの能力を最大限に発揮しつつ、連携先の役割や能力も理解しながらお互い協力し合って進めていくことが大切です。それは、支援、契約、研究協力から国際共同開発に至るまで、あらゆる連携に必要不可欠です。その際、さらに重要なこととして、厳しい状況になればなるほどお互い本音で話すことが、置かれた状況やその背景の理解に役立ち、より速い、より深い連携につながると考えています。本音を話すには信頼関係が必要となり、さらには本人が本気にならないとなかなか話してくれません。しかし、オブラートに包まれた議論では、安全保障環境、予算や人材が厳しくなっていく状況を乗り越えることは難しいと思っています。立場上で建前しか話せない、保全や技術管理についても考慮しないといけない、もちろんコンプライアンスを遵守しながらになりますが、そのようななかでも、少し大袈裟な言い方かもしれませんが、わが国一丸となって包み隠さぬ議論をしていくべきと考えています。

冒頭にも書きましたように、電装研は現在、宇サ電、ステルスやゲーム・チェンジャーに関する数多くの事業に携わっています。これらの分野の研究については、これまでかなりの年数にわたって地道に実施してきました。近年特に重要視され、技術戦略関連文書においても大きく取り上げられていますが、長年培った経験、知見や成果が現在の研究開発事業につながっていると考えています。ただ、これから20年、30年先を予測して技術基盤を維持・育成していくことは非常に難しいものです。将来に向けては、広がる領域にも対応しながらどのような有望技術を選択していくか、情報収集により動向を見極め、そして皆さまとの意見交換も経ながらどのようなビジョンを描いていくか、その予見性や信頼性を高めていきたいと思っています。

装備品の研究開発の中で適切な組織の役割を担えるよう、そして、その役割にふさわしい組織・人材となれるよう、電装研一体となって尽力していきたいと思っています。その際、上司のみならず、連携する人たち、そして所員に対しても、もちろん本音ベースでの「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」を重視しながらさまざまな議論ができればと思っています。ご期待に応えられますよう、また、ともにより良い方向に進めていけますようご協力をよろしくお願いいたします。

防衛装備庁 電子装備研究所所長